障がい児者の現場から　－Rさんの作品から学んだこと－

スカラベマン

私は月二回、障がい児者の現場で臨床美術を実施しており、10 年以上継続しています。ここでは印象に強く残っているRさんの２点の作品のエピソードをご紹介します。

Rさんは初期から継続して参加されています。脳性麻痺があり身体的な制約はありつつ、言葉によるコミュニケーションは活発で、エネルギッシュで独創的な作品をつくります。型にはまらない強い意志があり、粘り強く本人と向き合う中で、他者の意見を聞きそれを作品に取り入れることで表現の広がりを見せてくれるようにもなってきました。R さんのお母さんはしばしば「作品を見て成長を感じます」と嬉しそうに話してくださいます。

8年前くらいのことですが今でも印象に残っているのは「元気桜」のセッションです。「元気桜」は板の上に墨を垂らして枝ぶりを表現し、透明水彩絵の具で花を咲かせるアートプログラムです。

Rさんは花を咲かせる段階で、パレットの窪みの中で混ざり合う色水に興味を惹かれ、スタッフが提案しても板上の枝に花を描くことはありませんでした。こんなとき、アートプログラム通りにさせようと強制せず本人の進みたい方向を見守ることがあります。

彼が選んだ花の色が混ざり合う様子は、意識して一緒に見ていると風に舞う花びらのようにも風に揺れる花の梢のようにも、水面に浮かぶ花筏にも感じられました。色水の変化に見入る R さんはパレットの中に豊かな桜の情景を見ていたのだと思います。形としては残らなくても心に残る作品があるのだと感じました。

もう１つの思い出に残っているのは「大地に描く」です。こちらは黒い板上に本物の土で地をつくり、その上に地上絵のように描くアートプログラムです。共同制作から始まり、素材の強さとイメージの広がりがある個々の作品ができあがります。

ところが R さんは板に土で描くのを早々に切り上げ、メディウムが入っていた空の容器に土を入れ始めました。

「今は板に描く時だよ」と言ってしまいそうな気持を飲み込んで様子を見ていました。すると驚いたことに、容器の口から垣間見えた詰まった土は地球の奥深くのような、言うなれば大地の体内のように思えました。「板の色が黒いから容器も黒く塗ってみたら」と提案するとRさんは納得して集中して塗り始めました。塗りあがった容器を板に置くと一体化し、生命が積み重なった大地の深みと地中から鳴り響く大地の轟のように感じました。

いずれの事例も R さんが直接制作の意図を話したのではなく私が受けた印象ではありますが、人間はどのような人でも自己表現を通し世界の言葉を語ろうとするのだと思います。現は無限の世界に属し、その中では私が認識している表現など非常に小さな範囲でしかないのだと感じます。

こちらの枠で図ろうとせず、参加者から湧き出る表現を見守り、共に世界を発見していく姿勢が大切なのではないかとRさんとの関わりと作品から学びました。